

和様について ——三跡を中心に—

さんせき

一、三跡（三蹟）

・小野道風（おののみちかぜ・とうふう）（八九四—九六六年）

野跡



- 「王羲之の再生」と贊美された
- 和様の開祖
- 純日本的書の祖



- 「如泥人」と言われた。「泥の」とき人とは怠惰な人という意味。
- 道風様を継承したが、後年唐様に戻り、道風様から離れた。
- 和様の中の異端者。



- ・冷静沈着、温厚で大変まじめで面白くない人物。
- ・夢で道風に会い道風に書法を伝授されたと言っている。道風様を守り、和様の大成者となつた。
- ・朝廷の書き役として室町時代中頃まで続く世尊寺流の祖。代々「能書の家」となつていった。
- ・温和で優雅であかぬけた書風は天下太平な藤原道長の時代の貴族の理想美であった。
- ・清少納言はよき理解者であり、友人であったようだ。

小野道風

えいらんぞうばんたいかしょういならびにわうだいしきとうちよくしょ
円珍贈法印大和尚位並智証大師諡号勅書 〈九一七年〉

天台座主少僧都法眼和尚位圓珠

奇贈法印大和尚位並智証大師諡号勅書

天台座主少僧都法眼和尚位圓珠

円珍

勅慈雲秀嶺仰則

殊高法水清流酌之

寧盡故天台座主

少僧都圓珠戒珠

無塵蟻煩有幽渡

大瀛而求法駢異域

而尋師濟物在宗派

守攝於苦海剏他在

毫加斧斤於禪林

走以蒙霧敍其體

除朗月增其光明遺

大瀛而求法駢異域

而尋師濟物在宗派

守攝於苦海剏他在

毫加斧斤於禪林

是以蒙霧敍其體

除朗月增其光明遺

大瀛而求法駢異域

而尋師濟物在宗派

守攝於苦海剏他在

毫加斧斤於禪林

是之蒙霧敍其體

除朗月增其光明遺

大瀛而求法駢異域

而尋師濟物在宗派

守攝於苦海剏他在

毫加斧斤於禪林

右、法印大和尚位と号智
証大師とを贈るべし。
勅す。慈雲の秀嶺、仰けば
則ち弥高く、法水の清
流、之を酌めども寧ぞ尽き
んや。故天台座主少僧都円
珍。戒珠に塵無く、慧炬照
らす有り。大瀛を渡りて法
を求め、異域に聘せて師を
尋ぬ。物を済うを宗と為
し、舟楫を苦海に泛ぶ。
利他意に在り、斧斤を禪林
に加う。是を以て蒙霧其の
翳昧を斂め、朗月其の光明
を増す。遺烈永に伝え、
余芳遠く播る。志節を追憶
するに、以て褒崇するに足
らん。宜しく法印大和尚位
と諡号智証大師とを贈るべ
し。前件に依り主者施工す
べし。

延長五年十一月二十七

日。三品行中務卿敦美見

口。從四位上行中務大輔

源朝臣興平。

(勅を)奉り、(右の如く牒
到らば奉行せよ。)

奉

國潤

延長五年十一月廿七日

敦實

《和様の伝統的な書き方》

運筆は太くなめらかで、温和な円満な書。肥瘦にかたよらない中庸の筆法で、筆を堅に堅くとつて筆先で円くなめらかにゆるゆると書く。(單鉤法・藏法・直筆) 中国と違つて、日本の自然は「和」である。その自然に合わせて王羲之の書に肉をつけて道風は書いた。その日本のナ書き方は道風以来続いている。その源流は王羲之である。

流

法

清

濤

法

清

サンズイーはね上げ部が長い

前

遠

海

遠

濟

海

月

濟

月

月

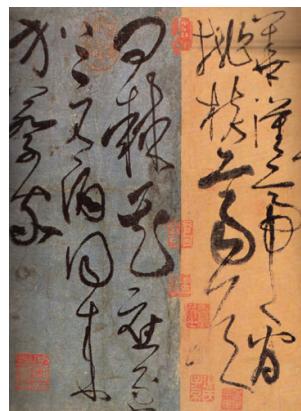
月

月

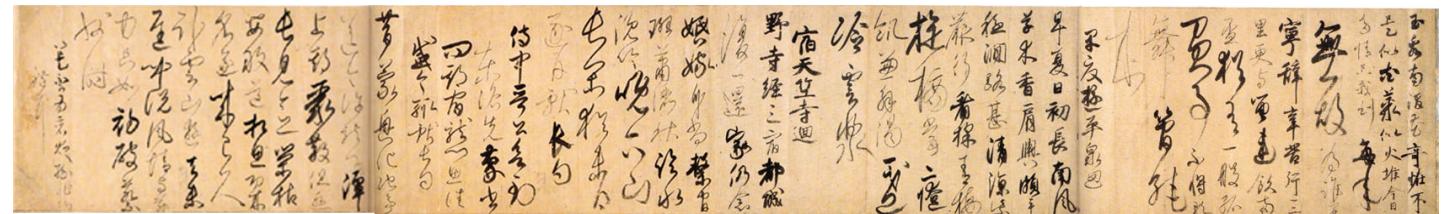
《王羲之との比較》

集字聖教序 (六七二年)

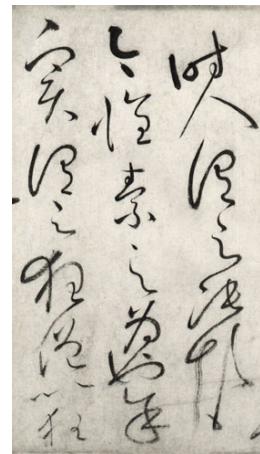
狂草



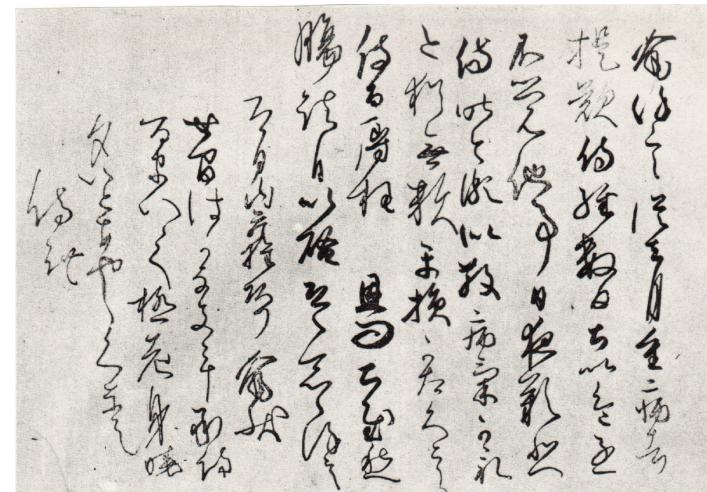
張
旭



玉泉帖
(白氏文集を書写)



懷素
「自叙帖」(七七七年)



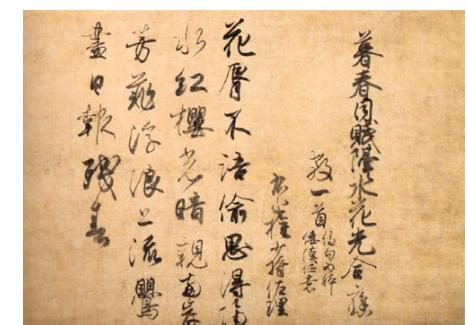
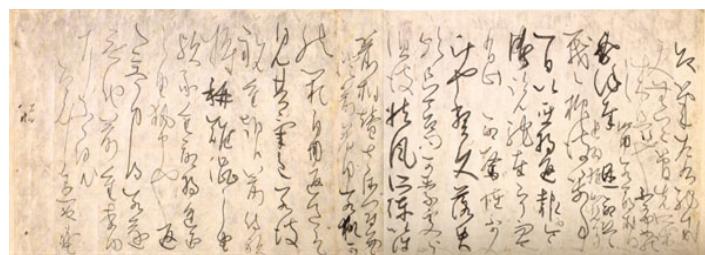
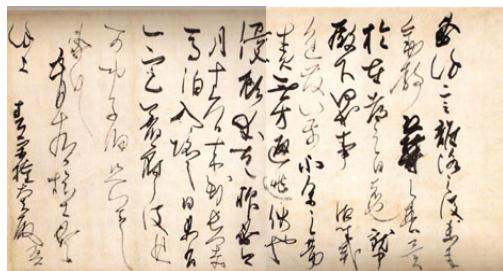
書状 (浪華帖)

野寺經三宿都城

中興事可憐
多謝才子人

漢代から尺牘(手紙)を芸術として鑑賞することが始まりたが、盛唐の頃の張旭、懷素によって横巻に詩を書いて作品を作り始めた。これ以後文芸が書によって鑑賞されるようになつた。

《尺牘から詩巻》



月夜坐傳唯以共榮
皆在是忘於萬山中
裏子重雪漫為高徑
南彩以酒東綠為道
草情白頭相到送被
之有明年乞傳以清
的行達學

送泉州宣奉馬赴
威里傳高貴謝馬傳
敬德优好詩人魯直不
得私閑累薪水年
晚上天津橋閑望偶逢
郎中張員外携酒同飲
上陽宮裏曉鐘隱天津
橋頭殘月方空闊晚經
此不覺飄飄身似空空
天星河隱映初生日彌
圓若龍生出烟此處相
連猶一酌知地上有
神仙

得私閑累薪水年
晚上天津橋閑望偶逢
郎中張員外携酒同飲
上陽宮裏曉鐘隱天津
橋頭殘月方空闊晚經
此不覺飄飄身似空空
天星河隱映初生日彌
圓若龍生出烟此處相
連猶一酌知地上有
神仙

一

二

三

四

五

六

新
行
柳
歸

行
歸
柳
新

細酒何所酒比月才
示此用事今宵能

固居屬於誰人紫宸殿
之庫主也秋水好於何
寶朱堂院之粉衣也
此吾吾而樂之故稱
我君君歡脫屣此木
唐之色

新
行
柳
歸
酒
比
月
才
示
此
用
事
今
宵
能

二、
紀貫之きのつらゆき（八六八？—九四五？）能書と伝えられるが真跡はない

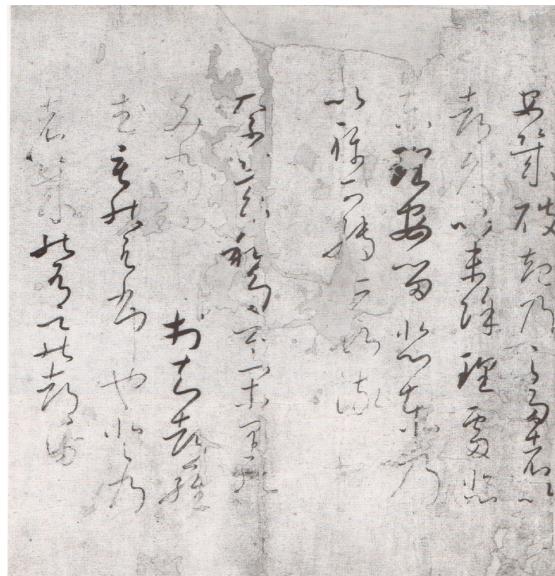
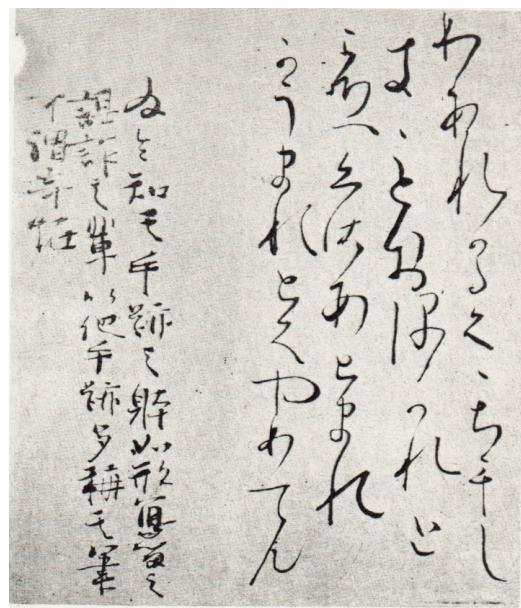
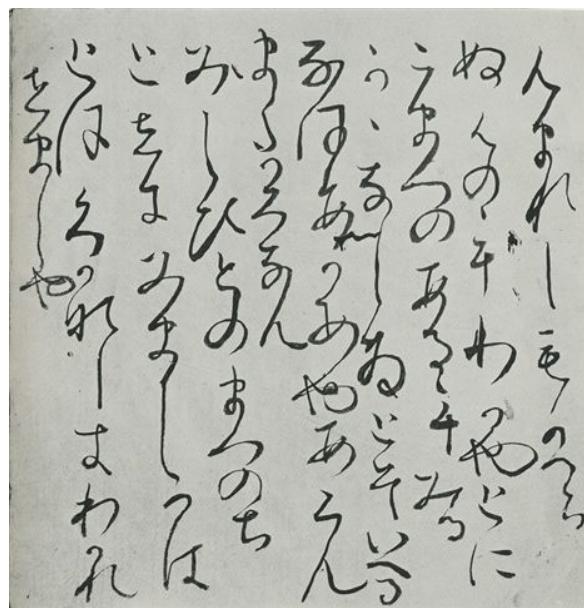
紀貫之

(八六八?—九四五?) 能書と伝えられるが真跡はない

『古今和歌集』（九〇五—九一五年頃）

仮名序 部立て (全巻の構成)

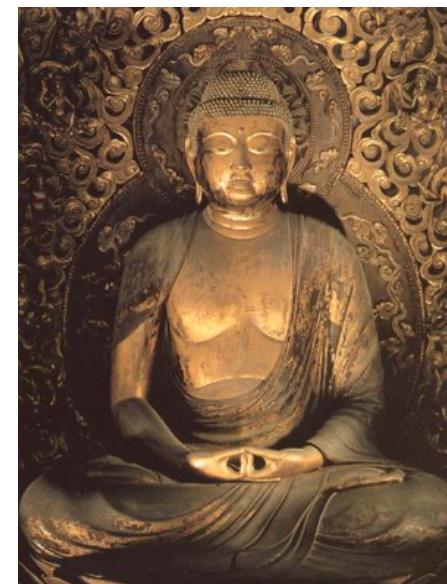
外来文化と日本文化

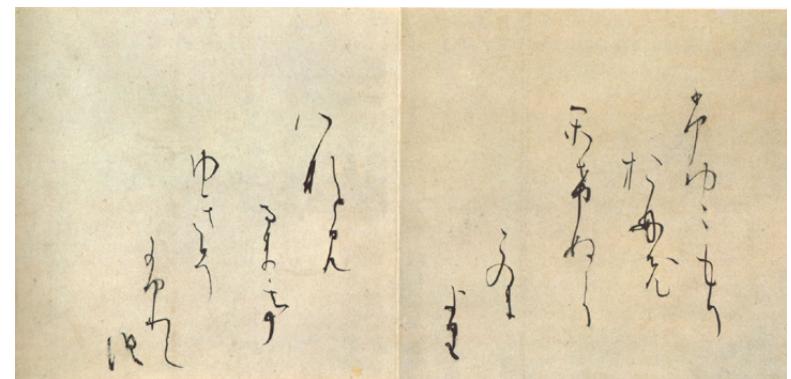
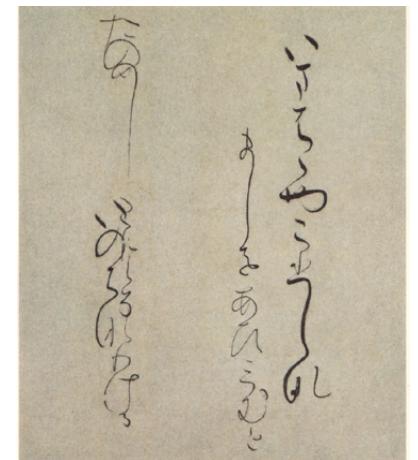
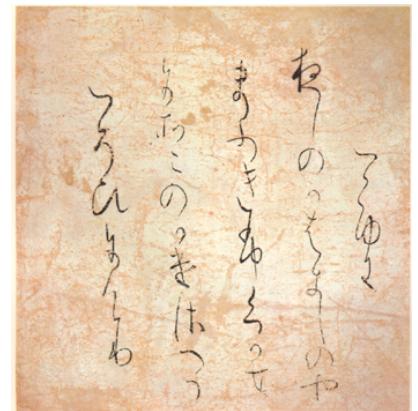


三、和様の文化（国風文化・藤原文化・藤原時代・藤原美術）

藤原時代は日本人として品位を求める心が生活・文化・美術に品位を重んじ、品位という美的理想を実現した。これは唯美主義を基調とした表面装飾の文化である。

和様建築





《参考文献》

- | | |
|--------------|-----------|
| 日本名筆選⑫⑬⑯⑭⑮⑯⑰ | 二玄社 |
| 中国法書選⑯⑭⑯⑮ | 二玄社 |
| 図説日本書道史 | 芸術新聞社 |
| 図説中国書道史 | 芸術新聞社 |
| 草書百科 | 芸術新聞社 |
| 仮名百科 | 芸術新聞社 |
| 紀貫之 目崎徳衛著 | 吉川弘文館 |
| 土佐日記 | 角川文庫 |
| 古今和歌集 | 各種出版されている |
| 書聖小野道風 | 春日井市道風記念館 |
| 書道全集⑫⑬⑭⑯⑰ | 平凡社 |
| 日本の書③ | 講談社 |